

世界の新しい経常収支不均衡と人民元の関係

経済産業研究所 吉富 勝

IMF によるいくつかの推定は、人民元が著しく過小評価になっているわけではない、と結論している。ところが世界の経常収支赤字合計の 7 割以上を占める米国の巨大な対外赤字(米国 GDP 比 6%、2004 年、プラザ合意時は 3.5%) や、中国の外貨準備の急増を前に、人民元の大幅な切上げを主張するエコノミストも多い。

この混乱した議論は次のような世界経済の大きな変化を見落としていることからきている。実は米国の対外赤字が 1990 年代の後半に急に増大し始めると同時に、東アジア全体でも、1997~98 年のアジア危機以降、黒字が急増した。東アジアでは二つの重要な変化が生じた。一つは、危機に陥った五カ国は、危機前には経常収支が赤字だったが、それが一斉に黒字に転じ、外貨準備が急増したことだ。ところが危機に陥らなかった台湾、シンガポール、中国でも、危機前の黒字が危機後にはさらに膨らみ外貨も急増した。二つに、中国の台頭は、東アジアに直接投資と貿易がリンクした新しい産業内垂直分業(これは伝統的な産業間垂直分業とも産業内水平分業とも異なる)に基づく生産ネットワークが出来上がったことだ。このネットワークの形成に基づくグローバルな三角貿易関係が、中国の対世界黒字よりも 3~4 倍もある(!) 中国の対米黒字を生んでいる。

それではこうしたグローバルな構図の中で、今日の世界の不均衡はどのようにして解決されるか。講演ではこれを明らかにしたい。